

# SKIPシティ国際Dシネマ映画祭2015

## 長編部門『それでも、お父さん』 高橋朋広監督インタビュー

——現在、日本テレビでバラエティ番組などのディレクターとして活躍されているそうですが、なぜ今回、自主制作での映画作りを思い立ったのでしょうか？

物心ついたころ4歳か5歳ぐらいだと思うんですけど、親の影響もあって映画が好きでよく見ていました。それから大学時代、友人と遊びですけど映画を作ったことがあって、これがとても楽しくて。その体験が忘れられず、漠然と映画監督に憧れを抱いたというか。僕の中で映画監督は特別な存在になりました。ただ、自分には何の実績もない。ですから、ドラマの制作現場があるテレビの世界に進むことにしました。それでテレビの世界に飛び込んで、情報番組やバラエティ、ドラマのADを経て、ディレクターへと確実にステップアップできたのですが、一方で映画への夢が遠ざかっていく。年齢的にも30代にだんだん近づき、映画が撮れない焦りが出てくる。それで現在活躍する日本の監督を見てみると、何も左右されないで自らの力で撮った自主映画からのスタートが多い。そのとき、思いました。“会社という環境の中に甘えては、一生映画は撮れないな”と。そこで自主制作で映画を作ろうと決意しました。



——その中で、今回完成した初監督作品ですが、脚本はどんなアイデアから生まれたのでしょうか？

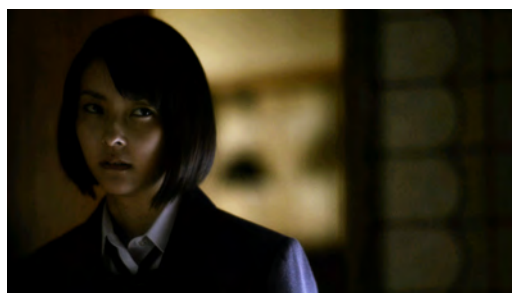
当時も今もそうなのですが、僕の中に“家族”と“人と人のつながり”というテーマが常に頭にあります。それに加え、今回は哀愁のある男性を描いてみたいと思っていました。多くを語らず、独自の美学をもって生きる男性といえますか。背中では何かを語る男性を登場させる映画ができればなと。そのとき、浮かんだのが今回の作品でも登場するホテルで父親と娘が並んで寝るシーン。これがすべての始まりで物語が出来ていきました。

——その物語は、四十九日の法要後に、高校生の未来のもとに生前の母が書いた手紙が届く。するとそこに自分の出生に関してのある秘密の告白が書かれている。それを受けた未来が、自らの出生の真実にたどりつこうとする。その過程を通して、未来と父親の心の戸惑いや苦悩、互いへの愛情などが浮かび上がる。一方で、“育ての親か？生みの親か？”といった命題にもひとつ問いを投げかけます。

父と娘がこういう状況に陥ったとき、どういう結論を出すのか？ ひと言では片付けられない。でも、勇気を持って自分なりの答えを描きました。作り手としてそこは逃げてはいけないところだと思うので。未来を演じた田畑亜弥さんが歌うエンディングテーマ曲の歌詞を含めて、ひとつのメッセージになっているので、最後まで見ていただければと思います。

——ひとりヒロインを立てて、女性の心理を描いているわけですが、男性である自分が女性の心情を描くことに躊躇はなかったですか？

最初はそういうことはあまり考えなかったのですが、出来あつたとき、女性の心理もそうなんですけど、子供をもったことのない自分がこういう物語を描いていいのかな？とは思いました。でも、いろいろと思いをめぐらせて自由な発想で物事描けるのがフィクションであり、映画。誰か忘れたのですがある人が、“実体験だけにとどまらず、いろいろな情報をたぐりよせてそれをひとつにまとめてひとつの形にするのが作家のすゝせ”といったような主旨のことをおっしゃっていて、自分もそういうスタンスで臆せず脚本を書いていきたいと思っています。ただ、女性という点に関して言いますと、リサーチというほどの取り組みではないんですけど、周囲の知人の女性たちといろいろと話すことで得た情報や本音が脚本に反映されていると思います。



『それでも、お父さん』  
監督：高橋朋広 出演：田畑亜弥、右近良之、加瀬信行、  
楊原京子、田中瞳佳、月登、いとう大樹、只野あつ子、  
連下浩隆 <2015年／日本／77分>  
©TOMOHIRO TAKAHASHI

——ずっと憧れた映画監督として初めて作品を作り終えたわけですが、いま撮影を振り返ってみてどんなことが思い起こされますか？

ともすると陳腐になりかねないドラマだと思うので、お芝居が過剰になってもいけないし、あまりさらっとしてしまっても印象に残らない。自分の考えるリアルティのある芝居をいかに成立させるのかに頭を悩ませました。ただ、父親役の右近良之さんをはじめ素晴らしい役者さんが集まってくれたので、すごく納得のいく形に出来たと思っています。あと、裏話で言うと、あと1日撮影が押したら成立しなかった。おそらくこの映画は完成の日の目をみなかったと思います。ほんとうにギリギリでなんとか撮り終えたんです。なので“よく完成したな”と(笑)。それが映画祭という栄える場所で披露されることになったのですから、ひとつほっとしたというか。スタッフとキャストにひとつ恩返しのできたかなと思います。

——そのスタッフはどうやって集めたのでしょうか？

撮影と照明の方はプロで、1回ドラマの現場でご一緒した人が話しにのって来て参加してくれました。彼は僕の友人か、知人の紹介などで来てくれて。はじめましての人もいたし、半分ぐらいは映像に関わる仕事をしていない人でした。でも、みんなほんとうに自分の仕事をまっとうしてくれて、すごくいい座組みが出来ました。録音を担当した友人はほんとうに素人なんですけど、ちょっとしたレクチャーを受けたら、もうその翌日には“ちょっと雑音きこえるから始まるのを待った方がいい”とか的確なアドバイスをして、これには周囲もびっくり(笑)。撮影を進めるごとにみんなのスキルがアップしていく感じで結束力も高まって最高の現場でした。

——今後の目標を教えてください。

最終的な目標は映画なので、やはり将来的には商業映画を撮れたらと思っています。ただ、いまはテレビの仕事もやりがいを感じているので続けていきたいと思っています。映像の世界も多様化しているので、いろいろなフィールドを体験することで力をつけて、いつか大きなチャンスをものにできたらいいですね。